

---

# ヒアアフター

なつめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒアアフター

### 【コード】

N36910

### 【作者名】

なつめ

### 【あらすじ】

ある日、目が覚めた私の両手は真っ赤な血で染まっていた。

## 血とドアペルー（1）

洗い流した血でシャワールームの床が鮮やかに染まっていった。しかしそれでもまだ私の手には赤い液体がへばりついていた。執拗なまでに手をこすり合わせてもなかなか洗い流すことはできない。まだ暖かい血だ。新鮮で流れたての血。油性の赤インクをこぼしたように冴えわたる色をしているが、それは疑いの余地もなく誰かの体から流れ出た血液だった。インクとは決定的に違う生々しさが感じられた。血に染まった両手は、自由を奪われたようにけだるく重い。それは誰かの命の重みを示唆しているのかもしれない。冷たいシャワーを顔から浴びると少しだけ頭がまともになったような気がした。正しい入れ物に戻って来たような感覚だ。しかし、自分の体に帰ってきたような感覚とは反比例するように私の頭を混乱が浸食していった。これは誰の体から流れたものなのだろうか。

私は溺れる夢をみて目が覚めた。ドイツのワイン畑の横を流れているような大きな川で、私は必死にもがいていた。観光客や、地元の人々、神父までもがビールを片手に私の溺れる様子を見物していた。ソーセージを食べているものまでいた。だからドイツだという印象が残っているのかもしれない。そんな優雅な雰囲気とは対照的に、私は必死にもがいていた。ちょうど川の中央当たりで、手足をばたつかせて助けをもとめていた。しかしどれだけ叫んでみても私の声には緊迫感が感じられなかった。自分が安物の演劇役者になってもなった気分だった。やがて私の手足が徐々に重たくなっていった。体の周りで粘土が少しずつかたまっていくように、体の自由がきかなくなつた。そこで私は死を受け入れる。静かに目を閉じて、訪れる死と対面しようとする覚悟を決める。再び目を開けた次の瞬間には、私は既にベッドの中に戻って来ていた。眠る前まで存在していた現

実の世界に戻って来ていたのだ。ただ一つだけ違ったのは、私の両手には真っ赤な血がついていたことだ。

## 血とドアベル（2）

シャワールームの床に流れる血が徐々に薄まってきて、ついには消えてしまった。私はそれでもしばらくの間、手を洗い続けた。目には見えないけれど、まだ何かがしみ込んでいるような異質感が両手を覆っていたからだ。しかし、どれだけこすってみてもその感覚を洗い流すことはできなかった。私はもう一度シャワーを顔から浴びた。そしていつもの2倍くらいのシャンプーを手にとって髪を洗った。丁寧に頭皮を指の頭で洗い、再びシャワーを頭から被った。洗い流す間、シャワーから流れている液体が水ではなく血液であるような感覚に何度か襲われて目を開けたが、もちろんそんなことはなかった。私はコンディショナーもいつもの2倍手に取り、丁寧に髪にしみ込ませるようになじませた。こういう状況でこそ、物事を慎重に進めなければ行けない。あせってはいけない。ゆっくりと時間をかけて基本的な動作をこなしていくべきなのだ。それが混乱を沈める手助けもしてくれるはずだ。

洗面台に向かい、ドライヤーで髪を乾かしているときに、ひげが少しだけ伸びていることに気づいた。朝食後に剃るのが日課になっているが、別に午前3時にひげをそったからといって何か問題が生じる訳でもない。この状況の中で、ひげをそるのはどこか後ろめたい気もした。これだけの異様なことが起こった直後に、日常的動作の典型ともいえるひげ剃りを行なうことに対しての、ある種の罪悪感のようなものだ。でも、私はとにかく何らかの作業を必要としていた。当然ながらもう一度ベッドに入って眠る気にはなれないし（できるくらいの神経があればいいのだろうけど）、だからといってソファアに座って時間をつぶす訳にもいかない。本だって読む気にならない。そうなると、後はひげを剃るくらいしかない。ひげを剃ってしまったら爪でも切ろうかと考えながら、ひげ剃りを手にしようとした時、ドアベルが鳴った。深夜3時に響くドアベルは異世界

で響く鐘の音のように聞こえなくもない。

もちろん来客の予定はない。こんな朝早くから人と会う約束なんてする訳がない。私は朝は得意ではないのだ。

誰がドアベルを鳴らしたかはわからないが、それが誰であれ、喜んでドアを開けたい相手でないことはあきらかだ。タイミングを考慮すれば、その誰かが私を呼んでいるのは、私の両手についていた血液と関係しているはずだ。もしかしたら警察かもしれない。そんなことを考えているうちに、ドアベルが再び響いた。さっきよりも、心なしか大きな音に聞こえる。

### 血とドアベル 一(3)

私は足音をたてないように気をつけてドアまで行き、覗き穴から向こう側を窺ってみた。しかしそこには白く照らされた通路があるだけで誰もいなかった。洗面所に戻ろうとした時、今度はドアをノックする音が聞こえた。手の甲で短く3度、コンコンコンと乾いた音が聞こえた。私はすぐに覗き穴を覗いてみたけれど、やはり誰もいない。でも確かにノックの音は聞こえたのだ。

躊躇する気持ちはあったが、それを必死に押し殺して私はドアを開けた。すると私の腰ぐらいの身長の中年の男がにこにこしながら立っていた。中肉中背の男は背中を小さくすばめて、手を律儀に前で揃えている。「中年の男」という題材で絵を描く人がモデルに選びそうな感じだった。その男を他の中年から唯一隔てるであろう特徴は、アンバランスなまでの背の低さだ。この男が私に何の用があるのかは全く持って不明だが、どうみても警察官ではなさそうだ。私は偏見に満ちた人間だ。警察官はがたいがよく、少しばかり長身でなければいけない。低すぎると、逃走する犯人に追いつくことができないし、力だつて弱い。高すぎると木偶の坊のように見えてなめられてしまう。もちろん、世間には背の低い警察官も背の高い警察官もいるだろう。でも理想的な世界ではそうあるはずなのだ。偏見は時として理想に限りなく接近する。そして正しい偏見は正しい意見を生む。

「いやー、どうもどうも」と馴れ馴れしい口調で中肉で背の低い男が言った。

私はこの男に対してどういう態度で臨むべきなのかを決めかねたので、黙っていることにした。まずはこの中肉の目的を知らなければ、うかつなことはいえない。

中肉は私の無反応を気にも留めない様子で続けた。

「私は佐藤っていいいます。そう、あのよくある名字の佐藤です。漢字もごく一般的な『佐藤』です。申し訳ないくらいに、ひねりも何もありません。もちろん下の名前もちゃんとありますよ。でも、友人には佐藤って呼ばせています。なぜだかりますか？

佐藤と名乗る中肉はわざとらしく間を空けた。

「わかる訳ないですよ。それは私が自分の下の名前が大嫌いだからです。『たかし』っていうんですよ、私の名前。なんとも芸のない名前じゃないですか。もしも私の名字が『早乙女』だとか、『権瓦』だとかパンチのきいたものだったら、まだ納得もできるんですが、なんてったって佐藤ですからね。それなら、いつそのこと『としお』って名前にでもしてくれただほうが特徴があつてよかつたですよ。『佐藤としお』ってね。ほら、『砂糖と塩』みたいだね。からかいがあつて、いい名前だと思うんですがね。そう思いませんか？」

てつきりこの中肉の背の低い男、いや、佐藤が、何かしら手についていた血と関係した話をするのではないかと期待していた私は、あまりにかけ離れた話題に虚をつかれて何も答えることができなかった。

佐藤は、私の答えなんか始めからどうでもいいといった様子で、続けた。「いやね、実は私の父親の名前が『としお』っていうんですよ。だからもうとられちゃってたんですね。父も母も、頭をひねつて、なにか気の利いた名前を考えようとはしてくれただはずですけど、途中で疲れちゃったみたいで、結局、まあ『たかし』でいいわよこの際、みたいな感じになっちゃったんでしょうね」

佐藤は、右手で頭の後ろを掻くしぐさをした。そして初めて私の目を見て言った。

「さて、この佐藤に何か言わなきゃいけないことがあるのでは？」  
私はこの男がまた何かふざけて冗談を言っているのかと思つて、しばらく様子をうかがつてみたが、佐藤はこの質問をしたきり黙っ

てしまった。どうやらふざけている訳ではなさそうだ。といても、私には質問の意味がまるで理解できない。いったいこの男に何を言わなければいけないというのだ。

「特に何も無いと思いますよ」と私は簡潔に答えた。

男は驚いた様子で私の顔をまじまじと見た。先ほどまでのふざけた感じはいつの間にか消えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3691o/>

---

ヒアアフター

2010年11月19日10時40分発行